

志田周子の生き方を回顧

現代医療支援策探る

山形でシンポ

女性医師をサポートするためのシンポジウムが26日、山形市の山形国際ホテルで開かれた。西川町大井沢地区で地域医療に生涯をささげた女性医師・志田周子(ちかこ)に焦点を当て、その生き方から現代の医療を考え

た。周子をモデルにした小説「風吹峠」の作者・高橋義夫さんが「よみがえる周子」と題して講演。高橋さんは小説を書く際のエピソードや読者

の反応などを披露し、「(周子を)『聖女視』する人々からの反発はあったが、人間として、一人の女性として物語の世界に生きてもらおうと思

った」と振り返った。さらに、患者が経済的な理由から治療を中断する「受診抑制」が目立っていることに触れ、「(周子の時代と)変わっていない気がする。病院に行くのはぜいたくだという考え方が残っているのかも



女医志田周子の生き方を振り返りながら、女性医師のサポートの在り方などを考えたシンポジウム＝山形市・山形国際ホテル

た後、総合討論を展開。「医師を増やすことも必要だが、今いる医師が仕事を続けられるようにサポートすることが効果的ではないか」「県内では女性医師の増加が顕著だ。多様な支援を展開し、モチベーションを高めることが必要だ」

周子が卒業した東京女子医学専門学校(現・東京女子医科大学)の後輩らが思い出を語るといふ姿勢を広めたい」などの意見があった。周子は無医村だった大井沢地区で1935(昭和10)年

から診療所の医師となり、生涯独身で地域医療に尽力し、62年にかけて生涯を閉じた。

婦人会長や村議なども務める一方、アララギ派歌人としても知られた。